

文学 × 政治 × 文化の批評誌

# アユラ

第一期  
2006-2009  
保存版

三人の研究者たちの四年の軌跡

西嶋一泰・深津謙一郎・マリリン  
ポストモダン・ギャルゲー・動物・ネオリベ  
2045年・計算不可能性・ヴァーチャル・リアル  
ロスジェネ・非正規雇用・生きがい・セーフティネット  
研究者・サヴァイヴ・象牙の塔・コミットメント



# プロフィール

---

## 西嶋一泰 (@souryukutsu)

一九八五年、大分生まれ、東京育ち、現在は京都で独り暮らし。立命館大学先端総合学術研究科の大学院生。専門は民俗芸能の現代史。主な論文は「一九五〇年代の文化運動のなかの民俗芸能 原太郎と「わらび座」の活動をめぐって」『コア・エシックス』六号、二〇一〇年。サブカル・デジモノも大好物。アユラでは編集を担当。

## 深津謙一郎

一九六七年三月、東京生まれ。専攻は日本近代文学。好きな作家は村上春樹。現在は共立女子大学で「日本文学演習」や「卒業論文ゼミナール」などを担当。共著書に、『村上春樹と小説の現在』（和泉書院・近刊）、『日本文学からの批評理論』（笠間書院）、『表象の現代』（翰林書房）などがある。

## マリン (@marinx)

慶應SFCの大学院生（M2）。西嶋&深津先生とは高校時代からの「幼なじみ」で一〇年来のお付き合い。政治学、政策分析、世論調査などで論文書いてます。二〇一〇年は本厄&大殺界（笑）で大変な年でしたが、残すところあと少なくてことで、がんばりませう。

イラスト Wreath of Laurel 浅乃ミサキ

<http://hinah.fc2web.com/>

アユラ Vol.02

2007.11

鼎談「2045年の計算不可能性」



Bungaku

## 『アユラ』第二号鼎談「前口上」

――あるいは、偏った立場による解説めいたもの

深津謙一郎

『アユラ』第二号（二〇〇七年一月発行）の鼎談タイトルは「二〇四五年の計算不可能性」。この年の四月に刊行された宮台真司と神成淳司の対談本『計算不可能性を設計する』（ウエイツ）を課題図書とし、各自それを熟読した上で討論が行われた。鼎談冒頭の西嶋の言葉を借りるなら、この本では、「社会がバーチャル化・ユビキタス化していくに際して、そのあるべき社会システムを考えるというような問題意識が問われて」おり、とくにそこにおいて、（鼎談タイトルにもある）「計算不可能性」をどのように担保するのが重要な焦点になっていた。ちなみに、鼎談タイトルのもうひとつのキーワード「二〇四五年」は、東浩紀と桜坂洋による未来学エンターテインメント「ギートステイト」の設定年である。

鼎談冒頭で行われた西嶋の問題提起は、次のようなものだった。すなわち、『計算不可能性を設計する』の中で「一・五次的現実」という概念に注目したい。これはオフラインの現実である「一・〇次的現実」や、コンピュータの中などオンライン上に構築された「快適すぎて『他者』がない」「二・〇次的現実」の欠陥を克服すべく提案された概念で、「二・〇次的現実」の仮想空間の中に、「一・〇次的現実」のある種の不条理さ（計算不可能性）をプログラミングした空間、というほどの意味である。今後、我々の生活空間には、こうした「一・五次的現実」が構成されていくだろう。だとすれば、これをどう評価すればよいのか？

こうした観点から、文学を研究する深津には、「プログラミングと文学の違い」、すなわち、「文学は計算不可能性を描けるのか。描けるのであれば、それはプログラミングには無理なのか」という「問い」が。いっぽう、政策を研究するマリンには、「高度な社会設計によって、計算不可能性も含み込んだ二〇四五年においては、市民社会は意味を成さず、したがって近代的な意味での「政治」は不要になるかも知れないが、この点についてどう考えるか、という「問い」が投げかけられた。

この「問い」かけに応じた我々の議論がうまくかみあっているかどうか……、むろん最終的には、それは読者それぞれの判断に委ねるほかないのだが、西嶋が「今までにない手ごたえもあった」（「鼎談にあたって」）と自負するように、私自身も、（かみあっているか、否かは別として）この鼎談は参加してスリリングであったし、三者間に共通するものや違うもの、それにそれぞれの（研究領域の抱える）課題が鮮明になったという意味で、『アユラ』史上ベストワンの鼎談だったと考えている。

※

「では、皆さん、我々の鼎談をお楽しみ下さい……」と言ってここで引っ込めればよいのだが、紙幅を埋めない限りそれは許されないらしい……。そういうわけで、私自身の偏った興味にしたがって、もう少し具体的に鼎談の内容に踏み込みながら、「解説めいたもの」を記してみる。

第一部「バーチャル化と社会」で最初に話題になったのは、計算された計算不可能性（他者性）は、ほんとうに他者なのか、という点であった。この問いを二人に投げかけたのは私だが、いま、あらためて鼎談を読み返してみても、この点については、いまだによく理解できない部分がある。他者性をプログラミングしたプログラムにおける他者なるものは、結局のところ飼いや慣らされた他者に過ぎず、それは「一・五次的現実」というより、より完成度の高い「二・〇次的現実」なのではないか、という疑念が払拭できないのである。

ところで、私はこの鼎談の中では一貫して、アンチ「二・〇次的現実」の側にたっている（つもりだ）。むろんそれが快適で、便利で、ある意味では民主的ですからある、という点は同意できなくもない。しかし、そこには「〈自由〉がない」というのが、私が「二・〇次的現実」に与せない最大のポイントである。では、ここで言うところの〈自由〉とは何か？ それはこの文脈で言えば、プログラムの外部を想像する想像力が担保された状態、というほどの意味である。あるいは、「いまはこうあるが、しかしこうではないかもしれない可能性を選択肢として思い描ける状態」と言いかえてもよいかも知れない。

ここで話が逸れるが、私の講義中、しばしば話題が現代思想に「脱線する」。たとえば、近代的な権力のありようとポストモダン的な権力のありよとの違いは何か、というような話である。その際、両者の違いについて説明する比喻（これは東浩紀が用いていたのだと思う。出典を失念してしまったが……）として、某ファストフード店のイスの話を持ち出すことが多い。ファストフード店側としては、効率よく客を回転させることが売り上げ向上に繋がるから、できるだけ客に長居をしてほしくない。近代的な権力観に拠れば、店内のあちこちに、「長居は他の客の迷惑です」というような内容の貼り紙を掲示して、客の良心に働きかけようとするだろう。これに対し、ポストモダン的な権力観に拠れば、客側の反発を買いかねない貼り紙などという行為はいいいせず、イスを硬くする（長時間坐っていることが苦痛になるようなイスを設計する）ことで、客の身体に直接働きかけようとするだろう。

近代的権力モデルでは、かりに客が貼り紙の要請に応じたにせよ、客自身の中で、「自分は貼り紙の要請に応じたが、しかし（それにより、かりに店側から不愉快な注意を受けたとしても）拒絶してそこに居座ることもできた」という、いまこうあるのは別のありようを思い描くことが可能である。自分は嫌々ながら権力に服従しているのだ、という感覚は、その権力が及ばない（その権力を転覆させた）外部への想像力を喚起するのである。これに対して、ポストモダン型の権力モデルでは、客は自らの快／不快の行動原理に従っているだけで（尻が痛くて不快だから店を出る）、自分が権力に絡め取られていることを自覚しないまま、したがって権力の外部などというものを喚起する余地も想像しないまま、権力機構の中に取り込まれてしまう。前述の言い回しを使うなら、人は「快／不快の行動原理に従っているだけで」、「いまはこうあるが、しかしこうではないかもしれない可能性を選択肢として思い描けない状態」に置かれるのである。

こうしたことを確認した上で、話をまた本筋に戻すと、「快適すぎて『他者』がない」「二・〇次的空間」という言葉から私が連想するのは、こうしたポストモダン型権力モデルなのである。そして、これももういちど繰り返すなら、プログラミングされた他者の存在により、より野蛮な「一次的現実」の他者に触れなくとも、「生々しい現実」に触れたと錯覚させる「一・五次的現実」と、すべてがプログラミングされた「二・〇次的現実」との差異が、私にはよく分からない。ということは、つまり、「一・五次的現実」が単純にポストモダン型権力モデル（環境管理型権力）に見えてしまうということなのである。

第一部を読み返してみると、上述の理由で、「一・五次的現実」に懐疑的（というより、否定的）な深津と、西嶋の議論が平行線を辿っているように見える。西嶋もまた、（恐らくは）「二・〇次的現実」をポストモダン型権力モデルと捉え、それに対するオルタナティブを目指している。それは深津と同じである。とすれば、二人の違いは、はやくからメディアの変容に柔軟に対応し、その結果、「二・〇次的現実」とは決定的に違う「一・五次的現実」の差異（可能性）が理論的・感覚的に理解できる西嶋と、その差異がイメージできない深津の世代差？ に還元できてしまうのかも知れない……と言ってしまうと、それは身も蓋もない話だろうか？

とはいえ、私も、そもそも外部が想像できないような「二・〇次の現実」の中で、にもかかわらずその外部があるはずだ、というときの外部を、（どこかべつの場所……という意味の）空間的に実体化するつもりはない。第二部「セカイ系と文学」の基調報告文、および鼎談の中で再三述べた「文学」の可能性はここに関わる。つまり、どんなに精巧にプログラミングされていても、そこに誤読（コミュニケーションの事故）は生じるはずであり、そうした誤読——これを私は文学的事象と名付けている——の中に「二・〇次の現実」の外部が、言わばゲリラ的に立ち現れるのではない。

しかし、こう主張する私の立場は、やはりどこかで近代主義的な「理性ある」主体を想定せざるを得ない。どんなに完璧に計算され、構築されたシステムでも、（あるいはだからこそ）誤読（コミュニケーションの事故）はつねにいたるところで生じているはずである。が、それを「事故」と認識し、さらにシステム外部への想像力に結びつけるには、やはりそれなりのリテラシー（近代主義的な理性）が求められるのではないか、という反論に対して有効に答えられる自信を持ってないからである。かといって、かくなるうへは……と開き直り、リテラシーを有する（と自認＝誤認する？）主体として、「二・〇次の現実」の中で快適さを貪る「動物化」した大衆を「啓蒙する」戦略を選ぶのも、あまりに近代的で気恥ずかしい（と言いながら、日々教壇に立つ自分がいて、これもさらに気恥ずかしい）。

その点から考えると、第三部「ポスト近代の政治」の中で、「他者への共感可能性」や「社会契約による国家と個人の関係再構築」を探るマリンの立ち位置は、徹底して「啓蒙の戦略」に立っており潔いが（と言いつつ、こと政治に関するかがり、深津の立ち位置も、「啓蒙的な」マリンの立ち位置に近いのだが……）、そうした彼の現在（二〇一〇年秋時点）興味は、一九二〇年代～三〇年代の思想家・北一輝に向かっているというのも興味深い。いっぽう、第三部での西嶋は、「動物化」に抗する可能性を個人（主体）ではなく、個人と国家、個人と個人を結びつける地域的・趣味的な中間集団のほうに置いていた。じつは今、次号『アユラ』のための新たな鼎談がゆっくりと進行中なのだが、ここでの議論がこれからどう発展していくか？ 我々三者の過去と現在、そして未来を測るうえで、ひとつのマイルストーンになるかと思う。

# 鼎談にあたって

---

鼎談にあたって

西嶋 一泰

二〇〇七年四月、社会学者の宮台真司とITアーキテクトの神成淳司の対談本『計算不可能性を設計する』が刊行された。本書は、IT技術の近代社会への本格的な進出を議論する非常に刺激的な内容となっており、その詳細は今回の議論の中でも触れられている。思想や文化を専門とする文系の私だが、かねてより情報技術については執心に近い興味を持ってきた。この本で出てきた話題を使って、文系と理系、いやそれよりもっと多くの専門的な知識がこれからの技術と社会について考えられるのではないかと、思いつき、今回の「アユラ」の鼎談のテーマに選んだ。

鼎談相手の一人で文学研究者でもある深津氏に突きつけたかったのは、「プログラミングは文学たりうるか」という問いである。文学が文字によりその作者の創造の世界を描くものとするならば、プログラミングもまたしかりである。文学にも多様な作品があるように、プログラミングにも多様な作品がある。文学の方法論を用いてプログラミングへの批評が可能とならないか、そんな私の妄想が今回の鼎談の地下に流れている。

鼎談のもう一人の相手で政策を研究するマリン氏には、政治という近代を前提とした社会のシステムを、情報技術が浸透していく社会においてどう再構築できるのかという問いを考えてほしかった。技術の発展は、単にそれだけを意味するのではなく、その技術を介して行われるコミュニケーションによって、人と人のありかたそのものをも変えてしまう。近代のプレイヤーである主体的個人は、ポスト近代において、どのように変化し、扱われるのか。それを考えたい。

この鼎談は、二〇〇七年一〇月に三週に分けて行われた。第一部は私、第二部は深津氏、第三部はマリン氏によるものとなっている。場所は、アミノユラクの電子掲示板「言論」。掲示板でのやりとり独特のラグがあり、多少読みにくいところがあるかもしれないが、ご了承いただきたい。二〇〇六年に発行した「アユラ」の第一号でも、鼎談を行っているが、今回はより深いところまで議論できていると思う。基本路線はそれほど変わっていないのだが、お互いのコンセンサスが整ってきている分、その立場的な差異もより明確となっている。そして、何よりも、今回の鼎談には、今までにない手ごたえもあった。「話がかみあっている」といえば、たいしたことには聞こえないかもしれないが、打てば響くような、単純な平行線でも、同じ立場のじゃれあいでもない議論ができたかと思う。専門を異にする私たちが、このような形で鼎談を行い、本書を発行できることを嬉しく思う。深津氏とマリン氏には、改めて、感謝を述べたい。そして、この鼎談の議論が、これを読む読者にも届き、共有されるものであることを願いたい。

二〇〇七年一月九日 京都の下宿先で 本誌の編集をしつつ

## 01. 「計算不可能性」とは何なのか

西嶋 はい、どうも、西嶋です。今回の鼎談で私が二人に振りたいのは「バーチャル化と社会」というテーマです。文学研究者の深津さん、政治学や経済学を勉強してるまりんさんとも共有できそうな問題だと思います。

今年の四月にウェイツから『計算不可能性を設計する』という本が出ました。これは社会学者の宮台信司とシステム設計者の神成淳司さんの対談本なのですが非常に刺激的でした。簡単に言えば、これから社会がバーチャル化・ユビキタス化していくに際して、そのあるべき社会システムを考えるというような問題意識が問われていました。お二人はこの本は読まれたんですよね？

深津 読みました。「計算不可能性」＝偶然性を設計する、というある種の語義矛盾に引っ掛かりましたね。

マリ 本を読むと、あなたが「語義矛盾」ではなくて、実際に「偶然性を設計する」意味や必要性について、具体的な議論が行われているんですよね。

深津 ただ、設計された偶然性って、ほんとうに偶然性なのか？ って思ってしまうけど…。

マリ そこは言葉の問題ですよね。たとえば、「ランダム性」いった方がよいのかもしれない。「ランダム性を設計する」だったらあんまり違和感がないかも。

西嶋 はい、とにかく「計算不可能性」というのをどのように扱うかというのがこの本の主題です。「計算不可能性」というのは、「偶然性」とも言い換えることができるし、「他者性」と言ってもいい。この「計算不可能性」をいかにバーチャル化した社会で担保するのが焦点となってきます。

すみません、まず込み入った議論をする前に、議論の前提となるような概念を提示して起きます。

この本で面白いのが、「一・五次的現実」という概念です。「一・〇次的現実」というのは、今のオフラインの現実です。「二・〇次的現実」というのはコンピューターとかの中のオンラインの現実です。普通、バーチャル化する社会に対する批判として、「二・〇次的現実」というのは、快適な空間なのかもしれないけれども、快適すぎて「他者」がいない。自己がゆさぶられるような瞬間がない。だから、バーチャル化はダメで、もっと人々は生々しい現実に触れるべきなんだ、というような意見が大勢をしめていると思います。そのような意見への回答として「一・五次的現実」があります。「一・五次的現実」というのは、「二・〇次的現実」の仮想空間の中に、「一・〇次的現実」のある種の不条理さのようなものも要素として構築された空間です。今後このような空間をよりうまく構築できるかが、世界の人々のくらしに大きな影響を与えるかと思われます。

マリ <他者＝計算不可能＝リスクを抱えたもの>を、居心地の良いユビキタス社会＝管理社会は、受け入れられるのかということですよね。

深津 西嶋さん、とりあえず、ここまでの前提はOKです。

ただ、何をもって計算不可能性と言うのかの定義は必要。さきほどマリんさんは、偶然性という言葉に換えてランダム性ということをやったけど、これは、たとえばガチャガチャで、あらかじめ仕込まれた数種類のうちのどれが出てくるか分からない… みたいな意味？ ただ、そうなると、不条理じゃなくなるよね？

マリ そうですね。確かに、ランダム性だと「他者」に内包される不条理や危険といった印象は捨象されてしまいますね。

深津 たとえば、他者という用語には、「大文字の他者」と「小文字の他者」と二つの意味がある。「小文字の他者」というのは、結局、「自己」を二項対立的に補完するもの。「自己」って、関係性の概念だから、自他の境界を引くことによってしか「自己」を定義できない。この場合の、ある種、「自己」に都合のよい他者が「小文字の他者」。「大文字の他者」というのは、自他の境界線自体を破壊（失効）させる外部という意味なんだけど。設計された「偶然性」というのは、結局、「小文字の他者」ではないのか？ と思ってしまうわけ。そうなると、設計された偶然性って、ただ、居心地の良い空間を補完するだけ？ と思ってしまうのだけど。その辺はどうですか？

そうなると、「一・五次」と「二・〇次」の差異がわからなくなる（笑）

マリ 深津先生の問題意識に相乗りすると、宮台は居心地の良いユビキタス＝管理社会に対抗するために、「計算不可能性を設計せよ」と言っているわけだけど、結局、計算不可能性で設計するという行為自体が、管理社会化を促進させるのではないかと思える。この辺りはゲンダイモンダイでも議論したけど、西嶋さんどうですか。

西嶋 んー、議論が進んでますが、どうしましょう。一応書いた文章があるんですけど、深津さんのほうの問いに答えたほうがいいのかしらん？ こちらからのネタフリは実はまだなんですけど…

深津 いや、書いた文章を載せてもらっていいよ。また、あとで議論を接続させればいいし。

## 02.一・〇の格差是正と二・〇の快適空間

西 嶋 了解です。いろいろ論点が出ていますが、具体例を出して考えてみましょう。

本屋が例です。現実の書店。ジュンク堂とか紀伊國屋とかっていうのが「一・〇次的現実」にあたります。ここでは、店員さんが書いたポップや並び順、あるいは平積みされた本の入荷状況や減り具合などから、いろんな本と出会うことができます。時には人が手に取る本をのぞいてみたりすることで、自分がこれまで興味がなかったような本を手にもすることもできるかもしれません。

ネットの書店。アマゾンなどが「二・〇次的現実」にあたります。アマゾンには、レコメンド機能というのがあり、自分がチェックした書籍から類推して、私が好きそうな本を提示してくれる。すごく便利で使いやすいんだけど、自分の興味の外にできるような出会いはない。

それで「一・五次的現実」にあたる書店というのが、3D空間によって構成されたネット書店。そこでは、現実の書店と同じように店員がポップを書き、売れ筋の商品が平積みになされ、立ち読みをする人たちがいる。現実の書店であるような出会いが、ここでもあるかもしれない。その可能性を演出（設計）してるわけです。ネット空間の3D書店は匂いや質感のようなものについては、現実の劣化版でしかありません。ですが、そこに行きかう人々は、地域の格差なく実に多様な人々が行きかっているかもしれません。それに、現実ではできない様々な出会い（立ち読みした人がポップとかを書き足していくことなど）も演出される。「一・五次的現実」はそのような、現実の劣化版ではなくてオルタナティブだと思ってください。

そのような「一・五次的現実」が構成される社会において、二人に考えてほしい問いがあります。ちなみに、哲学者の東浩紀も二〇四五年の社会を考える「ギートステイト」という企画を起こしていて、それとも関連づけます。

深津さんに答えてもらいたいのは、プログラミングと文学の違い。文学は計算不可能性を描けるのか。描けるのであれば、それはプログラミングには無理なのか。僕としては、プログラムに自らの想いや思想を託すプログラマーたちの「文学」はありうると思ってます。

まりんさんに答えてもらいたいのは、二〇四五年の政治です。高度な社会設計によって、計算不可能性をも含みこんだ二〇四五年においては、市民社会は意味を成しません。今行われている政府や地方自治体などの多くは民営化され、その高度に設計されたゲーム盤での競争によって、適宜微妙な調整が行われています。私たちは自分が欲望のまま動けば（といっても、動く選択肢は巧妙に設計されている）、社会がうまくまわるように設計されているのです。そこで、私たちは「主体化」し、「市民」になる必要はなく、「政治」に関心を持つ必要がありません。このような方向性で進んでいく社会をどのように捉えますか、あるいはそこにある弊害というほどのようなものが考えられるでしょうか。複雑化する社会や政治において、国民の民度に左右されず、ある程度うまくまわる仕組みを考えると、やはり「ギートステイト」のような方向性がみえてくると私は感じています。

と、以上が、今日ここにくる以前の、私が用意してきた流れや筋です。

深津 で、この話で、なんでこの3D書店が必要かと言うと、地方にいても、東京にいるのと同じように買い物できるから…、というわけだよね？ ある種、書店の民主化。あるいは、図書購入の機会均等化。

西 嶋 そうです。ネット上に書店をつくるメリットは、地域格差の解消とエネルギーの削減があげられます。あえて、3Dにする理由は、「一・〇次的現実」の書店の「不条理さ」のようなものもそこに埋め込みたかったからです。

マリ 深津さんから「民主化」というキーワード出ましたねー。これ重要ですよ。ユビキタス化は、住んでいる場所や、見た目といった格差を是正する装置にもなりうる。そのような意味では、個人の「自由」を拡大するツールでもあると。

深津 話が前後してしまったけど、そのような「一・五次」というのをアプリオリに議論してしまうのではなく、もうすこし内実を詰めた方がいい気がする。

たとえば、なぜ、それは必要なの（そうなるの）か、ということや、「一・〇次」や「二・〇次」との違いなど。問題点をもう少し上げてみましょうよ。

マリ そうですね。

西 嶋 私は、「一・〇次的現実」にはやはり「何か」があると思っています。それは「他者性」とか、「不条理さ」とか、「偶然性」とかいうもの。だからこそ生活圏の安易なネット空間への移行っていうのは危ぶまれている感がある。ネットを日常空間にするには、ネットを人生の半分以上を過ごす空間にしてしまうのは、まだなんとなく怖い気がするのだと思います。

でも、現実問題、「一・〇次的現実」を生き辛くもなってきたと思うんです。それは、地域格差や所得格差。あるいはエネルギーの枯渇や社会システムの効率化。それらを考えていく先に生活のある部分をバーチャルに移行する必要があると思うんですよね。その日常空間としてのバーチャル空間には、やはり「一・〇次的現実」のような出会いがほしい。それがないと、うまく人間が形成されないんじゃないかっていう不安が宮台さんたちにはあるんだと思います。

深津 マリンさんが言う格差を是正する装置という意味では、「二・〇次」は解放思想である。ただ、それが「自由」をもたらすかという疑問もある。「二・〇次」の問題は、やはり、タコつぼの主体化を促す点が問題だよね。当事者から見れば、嫌なものに出会わないで済むわけだから、そっちのほうが自由っぽいけど、人文系の人間に言わせれば、それは真の自由か、ということになる（笑）

西 嶋 タコつぼの主体化のオルタナティブとして「一・五次的現実」を提示してるんですよ。タコつぼの主体化の問題性みたいなのもっと議論して、取り上げていく方向性はありだと思います。それに基づいて、社会を設計していく議論がでてこないかな、と思ってるわけです。

問題提起がひと段落ついたので、ようやく議論に参加できるー（汗）

深津 西嶋さんの問題意識はよく分かる。ただ、一・五次がほんとうに格差是正につながるかは、現状では疑問。ネット・リテラシーの問題もあるし、お金の問題もある。プロバイダと契約するのにクレジットカードが必要だったりしない？ まあ、この問題は二〇四五年には解決済みということで論を進めてもいいんだけどね。あと、具体的な「一・〇次」書店における不条理さや偶然性ってなんだろう？

西 嶋 二〇四五年っていうのはギートステイトの設定年数なんですけど、それまでにはインターネットは無料化しているでしょう。現在でも無料で使えるホットスポットは街中にあります。そして一〇〇ドルPCのようなインターネット環境を世界共通のインフラにしようという試みもされています。二〇四五年までには、ある程度のインターネット環境やパソコン環境が基本的人権に盛り込まれるとおもいます。

一・〇次的現実の書店における「出会い」というのは、なんとなく歩き回って行為だと思います。書店から書店を巡って、なんとなく並べてある本をざっとみてみたり、そこにいる人や書店の雰囲気のかなで本をとってみる。何かひっかかるものがそこにあり、そこで初めて出会う本がある。っとそんな感じでしょうか。

アマゾンとの対比で考えるならば、アマゾンは自分がアニメ好きでアニメ関連のものばかりチェックしてたら、アニメっぽい趣向でカスタマイズされてしまう。でも、「一・〇次的現実」では、「アニメ好き」以外の自分の興味のようなものをそこで発見できるんじゃないかな



一と思うわけです。

あと、量的な問題もあります。

アマゾンの本をすべて見て歩くことは不可能です。選択肢がありすぎて逆に選べないという状況ですね。

しかし、現実の図書館や書店は、ぐるっとひとまわり自分の足で歩くことができる。その感覚やある種の節操のなさのようなものがおもしろいんじゃないかと。

### 03. 「一・五次的現実」の可能性と文系と理系の衝突

マリ ン 「一・〇次」書店では、例えば、店員の態度が悪くてむかついたり（笑）、あると言われていた本が、実際に本屋に行くとなくて、むかついたりということがあるかも。これは西嶋さんのいう「不条理さ」なのでは。

深 津 なるほどね。偶然昔の彼女にあって、焼けぼっくに火がつくとか（笑）。ただ、本を選ぶ、と言うことで言うと、「一・〇次」がタコつぼを回避できるか、じつは疑問。うまく言えてるかわからないんだけど、すごく悲観的なことを言えば、たとえばジュンク堂へ行っても、偶発的な出会で本を買うのか？、と疑問はあるよね。文学の本を買いに行つて、たとえば同じ棚の棚の本の方がいいじゃん、っていうことはある。それは、ネットで一本釣りするのは違う面白さがある。でも、そのくらいの偶然性って、リコメンドも用意できる気がするんだよね。医学や生物学の本を買ったりしないわけじゃん、結局…。

西 嶋 現在は、「一・〇次的現実」においても、タコつぼを回避できないんじゃないか、っていうのはそのとおりだと思います。だからこそ、「一・五次的現実」が、そのタコつぼを回避する契機も提供できないかっ、という期待もあるんです。そうすると、その「一・五次的現実」の「・五」の部分の問題になってくる。何を盛り込めばいいのか。

そこで問われてくるのが、「文学」がこれまで、「一・〇次的現実」の「他者」や「計算不可能性」を、どのようにして文字という仮想空間に描いてきたか（あるいはこれなかったのか）っていう問題意識を共有できるんじゃないかと思ってるんです。

マリ ン 「一・五次的現実」がタコつぼを回避する契機になるっていうのは、具体的にはどういうことですか？

西 嶋 私は、この「一・五次的現実」の構築にむけて、人文系やテクノロジー系や芸術系や理系のコラボレーションや議論が可能になってくるのでは…。というところにも希望をもっているんですが。

マリ ン 西嶋さんの言う、コラボレーションっていうのは、聞こえはいいし、期待したいけど難しい気がするな。やはり、理系VS文系になってしまう気がする。技術があるならどんどん使うべしというマッドサイエンティストVS技術で現実を補完なんてとんでもないという哲学者、みたいなイメージがある。

深 津 たしかにね（笑）。

西 嶋 でも、そうになったら、この話はおしまい。私は、この機会が人文系の人たちが社会に影響力を及ぼさないといけない責任がある、あるいはラストチャンスだと思ってる。

マリ ン ラストチャンスね。では、人文系の人たちにある程度、社会に対する技術の進出（浸食）を許容しろよと。そういうわけだよ。でも、そうすると、結局、従来の人文系は技術の前をすると無力だと言っているようなことになるね。

西 嶋 それはあまりにも「文学／技術」の二項対立でみられた状況分析だと思うよ。今までだって、人文系は、その時々々の社会の現実（それは技術革新を伴っていた）を受け止めて、社会に提言してきたのだし。「文学／技術」は対立項ではないと思うのだよ、古来より。つーか、技術の進出を許容しない文学なんてあるのだろうか。文字つかえないじゃん。

マリ ン いやいやそういうことではなく。たとえば、人文系の議論の立て方として、どうやっても特定の技術には抗したい、抗すべきという議論がありうると思うんだよね。たとえば、他者論とかでね。そうすると、現状の技術の土俵に乗って議論しないのなら（一・五次的現実を議論できないのなら）人文系が存在意義がないってのは、言い過ぎだと思うわけだよ。いつてることわかるかな？

西 嶋 言ってることはわかるけど。その人文系独自のスタンスを取りすぎてきたから、もう社会にとって人文系は空気のような存在だと思うよ。いてもいなくてもOK、みたいな。

もちろん、片方で、バーチャル化なんてダメだって意見が出てもいいけど、でもバーチャル化した社会をいっしょに考える人文系が出ないとおしまいだと思うよ。いや、そりゃ、人文系の中では、まだまだ問題は継続されて議論されたり、それなりに盛り上がりたりもするだろうけど、社会的にはもう本当に省みられない存在になると思うよ。それだけバーチャル化っていうのは、不可避で、重要な問題だと私は認識しています。

マリ ン この議論は了解です。

## 04. タコつぼ化する世界の主体？

深津 ごめん、ちょっと戻ろう。タコつぼの主体化というのは、結局、自分にとって居心地が良いものを消費することによって自己を固めていく。それはたとえば、アニメだったり、軍事だったり、文学だったり、野球だったり。で、互いに交通不能な状態ができていくのが問題ということですね。それを可能にした技術的条件が、メディアの変革である、と。

西嶋 以前は、「普通」をある種押し付けられていた。共通の話題や教養があったんですよね。同じテレビを見たり、同じ文学を読んだり、同じイベントに参加したり…。

でも、メディアの変革によって、自分が好きなことしかしなくてもよくなった。一家全員でみるテレビから、個人が好きな時間帯に使うパソコンへとメディアが変化したわけです。結果、タコつぼ化が進む。

深津 消費社会にとっても、タコつぼ化って都合がいいんだよね。顧客を確実に囲い込めるから。お客にしてみれば、嫌なものに出会うリスクが、お店にしてみれば、返品されるリスクが減る。で、「二・〇次」って、そのような傾向を進めそうな感じがある。という理解で、いいのかな？

西嶋 島宇宙化のマーケティングのしやすさっていうのはあるでしょうね。オタクっていうのが最近メディアに露出しはじめてるのもこの影響なんです。それまでは30代女性とかがマーケティングの対象としてある種のブームとかを作ってきたり、あとは団塊の世代や女子高生みたいなのがあります。オタクは、ある意味で結構同質的な部分もあるし、マーケティングの対象としてもいけるんじゃないかっていう感じです、経済的にも。

本人たちとしても、ここはオタクがいていい場所とされるところは落ち着くと思います。それに仲間もいますしね。特殊な趣味の仲間が見つかりやすいっていうのも、インターネットの特徴です。

マリン 「二・〇次」は、グーグルやアマゾンに代表されるような、パーソナライズがキーワードですよ。自分の好みにどんどんカスタマイズされて、自分好み強化されていくって感じかな。

深津 そうですね。それで何が悪い？っていう問いに答えなきゃいけないね。人文陣営は…。

西嶋 それにとりあえず答えるなら、それでは近代的市民が成立せず、近代市民社会が成り立たないから悪い、というしかないような気がします。教育の観点ですね。主体形成と言い換えてもいいですが、自分の興味や領域の外に出る機会やその力っていうのは重要です。まだ見つけてない私の可能性みたいなのが、「今の私にとって」最適化された空間だと担保できない。その「未知の私」に出会う機会を、最適化された「二・〇次の現実」は奪ってるともいえるんじゃないでしょうか。逆に、人々が主体化をとげず動物のままうまくやっていたけるシステムを構築する未来を描いたのがギートステイトだともいえるんですけどね。

深津 許容というか、前提条件は無視できないからね。テクノロジーが変容すれば、主体も変容するわけだし。ただそのなかで、近代主体として（笑）、言いたいことは言っておきたい。

で、そういうことで言うと、「二・〇次」が問題なのは、やっぱそれは「自由」でないから…ということになる。嫌なものに遭う「かもしれない」という可能性の中で、はじめて選択する「自由」が生まれる。いや、そうでなくて、嫌なものに合わないほうが「自由」じゃん、っていうふうに技術者が考えるなら、その部分で議論を仕掛けなきゃいけない。

深津 要は、今言った近代的な「自由」や「主体」の議論が、がきちんとした着地点を持てるのか、という部分ではあるよね。「動物さん」たちに対して（と言って、自分が「動物さん」でない保証もないけどね）。

「自由」ということでいえば、政治思想にも影響がありそうだけど、その辺はどうなの？ 選挙の投票行動とかさ。「ワン・フレーズ」ポリティックスとか、「二・〇次」っぽくない？

### 五、構造的バーチャル・メリトクラシー

西嶋 自分でこの話を振っておいてなんなんですけど、今ちょっとシミュレートしてみると、「一・五次的現実」と「二・〇次の現実」って結局選択性になると思うんですよ。実際問題。社会のインフラの一部（あるいは大部分）がネット空間に移行するにあたって、プラットフォームを「一・五次的現実」にするか、「二・〇次の現実」にするか選ぶようになる。

そうすると、「二・〇次の現実」を選んだ人っていうのは、結構快適で自分の好きなことをやったりしてすごせるんだけど、結局政治への手段みたいなものを失っちゃう。動物化しちゃうんですね。ギートステイトのギートのような存在。

それに対して、「一・五次的現実」を選ぶのは、ある程度教養のある過程やお金がある家庭。小さいときから意識的に主体形成を視野に入れた教育みたいなんが行われて、これがいわば社会を動かす主体になる。

…と漠然とこんなイメージが湧いてしまった。うーん、このあたりをうまく解決しないと「一・五次的現実」も結構厳しいかもしれない。

深津 よいまとめ。西嶋さんが以前展開した「パトリ」に対する反発も同じところにある。同じことは、政治にも言える。「劇場政治」って、すごく口当たりのいい部分だけ焦点化（単純化）して、あたかもそれ以外の争点は存在しないかのように、面倒な部分を消去するでしょ？ それが、マスメディアを通じて拡大再生産されるし。これに対して、批判できるのは「持てる人」たちだよ。ただ、「パトリ」の時と矛盾するようだけど、この場合、批判できる立場に開き直ってよい気はする。

マリン これ重要ですね。「二・〇次」ではなく、あえて「一・五次」を選ぶ人がどれだけいるか。

### 六、二〇四五年に「政治」はありうるのか？

マリン 先ほど出た深津さんの問いに答えると、タコつぼ化は政治思想の分野（民主主義・リベラリズム・福祉国家など）にとってもクリティカルな問題です。西嶋さんも言ってましたけど、近代国家というフレームは、国家領域内にいる雑多な人間たちを「国民」という同質的なフレームでくくることによって担保されたわけですよ。タコつぼ化によって国民の同質性がなくなることで、国民全体で支え合うという福祉国家的なフレームが解体される恐れもあるんです。国民相互の共感可能性が低下することによって、なんでアイツらが生きていくために俺らの税金がつかわれるんだよっていう不満が強くなる可能性もある。あとは、民族独立みたいな感じで、オタク独立みたいな。コソボ自治州ならぬ、アキバ自治州みたいな（笑）

深津 そうだね。で、その同質幻想の崩壊を、自己責任と言う言葉で「運命」化し、共同体を何とか繋ぎとめようとしているのが今の日本社会。これって人文的だよ（笑）。

西嶋 現時点で、オタクが主体化し、独立する意識を共有するのは不可能だと思う。

もし、ありうるとしたら、数人のアーキテクトや仕掛け人が、「オタク独立」という祭のネタを振って、「勢い」で独立するしかない。そして、その後の自治州の運営も、近代的市民による政治じゃなくて、動物化したオタクたちをうまく動かすシステムによってなされると思うね。

そこでは、もはや「政治」なんていらぬという感じだと思う。

深津 政治っていうのも、やっぱり近代って感じがするよね。

やはり、近代的主体を前提にしないと成り立たぬ気がするけど。そのへんはどう？

マリ ン オタク独立はあくまでレトリック。別に独立すんのが、オタクだろうが、セレブだろうが何でも良いんだよ。ただ、一つのタコツボグループが国家から独立しようとする可能性は排除できないだろうと言う話。たとえば、「持てる者」たちが節税のために、国家というフレームから抜け出そうとする可能性は十分にあると思うね。自治州みたいな感じでさ。

深津 イタリアの北部や、ベルギーの北部が南部を切り捨てようとしているもんね。げんに。もともと、日本もそうだけど、国民国家として一〇〇年ちょっと。歴史的パラダイムが変わりつつあるのかもしれない。

マリ ン その辺りのパラダイム転換みたいなものを僕の文章では、取り上げたいっす

西嶋 いや、でもまあ、そういうタコツボグループが「独立」したとしても、そこではたして「政治」が行われるかっていうのが、私が気になってるところね。

マリ ン 確かに、セレブが独立したところでは「政治」が行われぬ可能性は高いね。政治は消えるかも・・・

深津 タコツボ「独立」＝「二・〇次」への自閉（この等式はこれでいい？）において、政治は可能なのか？ という問題は大事だね。

西嶋 そのあたりの問題意識が一番最初のまりんさんへの問い二〇四五年に「政治」はありえるのかという問いに繋がるわけです。

マリ ン なるほど。すばらしい！

深津 で、きょうはここでいったん切りますか？

西嶋 今日はこのへんにしましょうか。どうですか、まだ話しておきたいことありますか？

マリ ン 考えなくてはいけぬ宿題がいっぱいできたので、今日はだいぶ満足しました。

西嶋 今日、初日には、なかなかよかったですね。それでは、次回もよろしくおねがいします。

もそも、C O & B は存在しないかのように、面倒な部分を消去するでしょ？ それで、マスメディアを通じて拡大再生産されるし。これに対して、批判できるのは「持てる人」たちだよ。ただ、「パトリ」の時と矛盾するようだけど、この場合、批判できる立場に開き直ってよい気はする。

マリ ン これ重要ですね。「二・〇次」ではなく、あえて「一・五次」を選ぶ人がどれだけのいるか。

六、二〇四五年に「政治」はありえるのか？

マリ ン 先ほど出た深津さんの問いに答えると、タコツボ化は政治思想の分野（民主主義・リベラリズム・福祉国家など）にとってもクリティカルな問題です。西嶋さんも言ってましたけど、近代国家というフレームは、国家領域内にいる雑多な人間たちを「国民」という同質的なフレームでくくることによって担保されたわけですよ。タコツボ化によって国民の同質性がなくなることで、国民全体で支え合うという福祉国家的なフレームが解体される恐れもあるんです。国民相互の共感可能性が低下することによって、なんでアイツらが生きていくために俺らの税金がつかわれるんだよっていう不満が強くなる可能性もある。あとは、民族独立みたいな感じで、オタク独立みたいな。コソボ自治州ならぬ、アキバ自治州みたいな（笑）

深津 そうだね。で、その同質幻想の崩壊を、自己責任と言う言葉で「運命」化し、共同体を何とか繋ぎとめようとしているのが今の日本社会。これって人文的だよ（笑）。

西嶋 現時点で、オタクが主体化し、独立する意識を共有するのは不可能だと思う。

もし、ありうるとしたら、数人のアーキテクトや仕掛け人が、「オタク独立」という祭のネタを振って、「勢い」で独立するしかない。そして、その後の自治州の運営も、近代的市民による政治じゃなくて、動物化したオタクたちをうまく動かすシステムによってなされると思うね。

そこでは、もはや「政治」なんていらぬという感じだと思う。

深津 政治っていうのも、やっぱり近代って感じがするよね。

やはり、近代的主体を前提にしないと成り立たぬ気がするけど。そのへんはどう？

マリ ン オタク独立はあくまでレトリック。別に独立すんのが、オタクだろうが、セレブだろうが何でも良いんだよ。ただ、一つのタコツボグループが国家から独立しようとする可能性は排除できないだろうと言う話。たとえば、「持てる者」たちが節税のために、国家というフレームから抜け出そうとする可能性は十分にあると思うね。自治州みたいな感じでさ。

深津 イタリアの北部や、ベルギーの北部が南部を切り捨てようとしているもんね。げんに。もともと、日本もそうだけど、国民国家として一〇〇年ちょっと。歴史的パラダイムが変わりつつあるのかもしれない。

マリ ン その辺りのパラダイム転換みたいなものを僕の文章では、取り上げたいっす

西嶋 いや、でもまあ、そういうタコツボグループが「独立」したとしても、そこではたして「政治」が行われるかっていうのが、私が気になってるところね。

マリ ン 確かに、セレブが独立したところでは「政治」が行われぬ可能性は高いね。政治は消えるかも・・・

深津 タコツボ「独立」＝「二・〇次」への自閉（この等式はこれでいい？）において、政治は可能なのか？ という問題は大事だね。

西嶋 そのあたりの問題意識が一番最初のまりんさんへの問い二〇四五年に「政治」はありえるのかという問いに繋がるわけです。

マリ ン なるほど。すばらしい！

深津 で、きょうはここでいったん切りますか？

西嶋 今日はこのへんにしましょうか。どうですか、まだ話しておきたいことありますか？

マリ ン 考えなくてはいけぬ宿題がいっぱいできたので、今日はだいぶ満足しました。

西嶋 今日、初日には、なかなかよかったですね。それでは、次回もよろしくおねがいします。

（第一部 了）

## 05.セカイ系と文学

深津 「山に阻まれ、携帯電話もラジオの電波も届かない、隔離された場所、凹村。中学三年生で受験生の凹沢アルは、村以外の世界を拒む凹伴ハジメ、楽しければ何でもいい凹坂カヨら同級生たちと、何も起こらない平穏で平たんな毎日をおくっていた。そんな日常を嘆き、上空を通り過ぎてゆく不思議な流星に願いをかけるアル——「この平和な村がどうにかなっちゃえばいい」。直後、村に降ってきたそれは、小さな世界に落ちてきた大きな世界への入口になるはずだったのだけれど……」（西島大介『凹村戦争』ブックカバーの紹介文より）

東浩紀ほか『コンテンツの思想』（青土社、二〇〇七年三月）のなかで、西島大介は新海誠に対し、『凹村戦争』（二〇〇四年）は『ほしのこえ』（二〇〇二年）に対するアンサー（応答）だと述べている。まずはこの問題から考えてみたい。

『ほしのこえ』は、宇宙間戦争とそれがもたらす距離（＝八光年という時間でもある）により引き裂かれた男女がメールで気持ちをやりとりする話だ。こう書くと、ダイアログ（恋愛）が主題のように見えるが、そうではない。『アユラ』第一号（二〇〇六年）にも書いたが、主人公たち——ミカコとノボル——は外界に対して、というより、互いに対してすら「無関心」で、自閉している。その意味で、『ほしのこえ』は、（相手に到達しなくてもかまわない）モノログが行きかうだけの話といえる。新海誠自身は、この点に自覚的である（注）。彼はおそらく確信犯的に、居心地の良いアイテムを「身も蓋もなく」集め、自閉空間を脅かさな世界（セカイ）を作っている。

ところで、先日行った第1回目の議論の文脈にこれを繋げれば、『ほしのこえ』の世界（セカイ）は「二・〇次的現実」といえるかもしれない。これに対して、『凹村戦争』が描こうとするのは、「二・〇次的現実」の「外部」、というより、現代（近未来？）において「外部」に出会うことの不可能性である。

ブックカバーの紹介文にもあるように、「何も起こらない平穏で平たんな毎日」に辟易した主人公・凹沢アルは、その脱出口として宇宙戦争を欲望する。そして実際、彼の欲望を実現させる形で、言わば「ご都合主義的に」ストーリーは進行していく。ところでこの場合、「ご都合主義的に」という部分が重要である。H・G・ウエルズを読んでいると「本当に」火星人が現れるように、日常の外部（への想像力）は日常によって規定されていることを、このまんがは露骨に明らかにするからだ。凹村戦争は、「TSUTAYA」ならぬ「タツヤン家」が提供する映画的想像力の延長線上にしかない。

それにもかかわらず、そこに脱出口としての「外部」を幻視しようとするロマン主義的心性が、『凹村戦争』では批判されている。その批判はまったく正しい。しかしその正さが逆に、「二・〇次的現実」を隙のない自閉空間としてデザインしてしまう点も否めない。「あとがき」によれば、このまんがのコンセプトは、「最高に滅茶苦茶に容赦なくやること」であるという。が、それはあくまでも、「計算された」最高に滅茶苦茶な容赦なさでしかない。

『凹村戦争』に欠けているのは、物体XがほんとうにXの形をしている（これは一見、滅茶苦茶なように見えて、実際は想像力が現実を規定するという正論である）のではなく、Yの形をしているかもしれない可能性（想像力が現実を規定しないかもしれない可能性）である。それはあるいは、火星襲来を天皇人権米と読み違え、村人が米屋に殺到して将棋倒しになってしまうようなコミュニケーションの事故と言い換えてもいい。

そして、ここまで論じたうえで、プログラムと文学の違いはどこにあるのか、という西嶋さんの第一回目の議論の問題提起に答えるなら、文学はこのような事故のうちに現前するものだと考える。文学は、「二・〇次的現実」の外にあるのではなく、それと共にあって、事故が起きる一瞬に、いわばゲリラ的に立ち現われるのだ。その意味で、『凹村戦争』は文学ではない。むしろその死を描いている。しかし、ここで死亡宣告を下すのは性急すぎる。『凹村戦争』は、いまだ「最高に滅茶苦茶に容赦なくやること」をやっていないからだ。

（注）『コンテンツの思想』（前述）の中で、新海誠は、エンディングのセリフ——「ここにいるよ」——をダイアログとして作っていないと述べている。

## 06. 『凹村』の計算と「動物的」読者

西 嶋 『凹村』の話ですが、深津さんの言いたいことはなんとなくわかりました。思ったのは、『凹村』が描いていないコミュニケーションの事故というのを、例えば、『凹村』で描くとすればどのような描き方がありえたのか（Yの形の宇宙人がとんでくればいいのか）。いわゆる「文学」とされるものはどのようにそのコミュニケーションの事故を書いてきたのかっていうのが気になりますね。何か具体例があれば、教えてほしいです。

深 津 基調報告という文学と、西嶋さんがいう「文学とされるもの」とは分けて考える必要があると思う。前者は文学的事象（ここでは、コミュニケーションの事故のことを言う）で、後者は制度としての文学。文学的事象は、制度としての文学の専有物ではない。また、意図して書けるものではない。それは、「読み」（誤読）を通じて生成される。『凹村』は、その意味での誤読に対して、あまり「開かれた」作品でないと思う。どういうことかというと、『凹村』は、プレテキストを「読む」ことで物語を進行させるわけだけど、その「読み」が完璧（自己完結的）で、事故が排除されていると思うわけ。

西 嶋 誤読に対して「開かれた」作品でないというのは、作者の意図がわかりすぎて、作者のコントロールを離れないから、って意味でしょうか。なんつーか、考えて作品作りすぎてことですかね。

深 津 そうだね。「考えて作品作りすぎ」というのは、まったくそのとおりだと思う。

マリ ン 深津さんは、「現代において外部に出会うことの不可能性」というものを論じています。外部というのは前回の議論に引きつけると、「他者」とか「計算不可能性」などと言い換えられると思います。これは、現代における文学とは何か、という問題につながるのですが、現代においては外部が想定されていない物語が多いと思いますし、それが好まれ、受容される傾向もあると思います。

『凹村』の著者の西島大介は、ライトノベル系の雑誌に作品をいろいろ掲載しているわけですが、「ラノベ」っていうのは、深津さんのいう文学に該当するのかがということが少し気になりますね。これは西嶋さんが詳しいと思うのですが、たとえば、最近ヒットしている『ハルヒ』シリーズなんかは、外部とか他者とか「古き良き文学」がテーマとしたものがある程度括弧入れしてストーリーを進めているんじゃないかと思うんです。「ラノベ」の大ヒットなんかを見ると、「物語」の受容者の構造変化を示しているんじゃないか。つまり、前田愛なんかかいう近代的読者から、「動物的」読者への変化というのでしょうか。そんなマクロの文学の変化を感じるのですが。

西 嶋 んー、なんていうのかな。今は今で、コミュニケーションで事故ってると思うんですよ。どういう場面かということ、それは「作品」内部には縫合されていません。むしろ作品を飛び出したキャラクターを介したコミュニケーションによってもたらされているんじゃないかと。アニメやマンガを語ることはもちろんですが、アニメやマンガを飛び出したキャラクターを描く同人誌やネットのファンコミュニティ。そこでのやりとりのなかに微妙な反応の差異みたいなのがあって、それが時々事故ってるんじゃないかなって感じがします。

……ですが、それも現在は、「作品」はあくまでネタで、とりあえずそれをネタにして泣いたり、笑ったり、ワイワイやろって、共感ベースのコミュニケーションに移行してきたような気がします。そのあたりは、マリ ンさんが言った「動物的」読者に近いかな。

自分を肯定するようで何なんですけど、私は少なくとも、『エヴァンゲリオン』のときに、それがまるで私の一部になってしまったかのような問題意識で、ウェブを彷徨ってました。そこには少なくともコミュニケーションの事故はあったと思います。

マリ ン そうそう。そういうコミュニケーションレベルでの事故というのはあるんですよ。それは、深津さんの言う「事故」とはどう違うのかということのを具体的に聞きたい。深 津 同じでいいと思うよ。

西 嶋 『エヴァ』はいろいろと「失敗」をした作品だけど、だからこそ「文学（的事象）」となりえてる。あれは、果敢に自分の中に引きこもっていく際にも、いろんなわずらわしい物が邪魔して、居心地のいい空間にいれないってことが執拗に描かれてるし。

深 津 同感です。アンチ居心地の良さ、みたいなものが『エヴァ』にはあるよね。では、『エヴァ』と『凹村』を分かちつものは何なのか？ 作家個人の教養の問題か（笑）、世代の問題か、メディアの問題か、オーディエンスの問題なのか？

西 嶋 それは、前にも触れましたが、自分にとって重要な「物語」たりうるか、だと思います。とりあえず、まず、今の自分の状況と作品内で、描かれるキャラクターのおかれた立場で、相似形をみつけることが必要です。そして、そのキャラクターが自分の分身のようになること。その自分の分身が、どうしようもないような場面に巻き込まれていく……というところで、初めてコミュニケーションの事故が起こる。というか、些細な差異でも重要になってくるんです。

そのあたり、西島大介の作品は、なんというか、あくまで飾られた作品のように、あるいは店頭にある商品のように、こざっぱりまとまりすぎていて、あくまで作品に距離をとってみちゃうんですよ。へえー、みたいな。細かい差異が別に重要にならない。他人事だし。そこが、違いののではないかと。もちろん、西島の作品があるいは、読者によっては文学として発現することもあるでしょうが、その可能性は低そうですね。

## 07.「綾波萌え」は事故といえるか？

マリン 『エヴァ』は、動物的読みに対抗する作品だった。でも、それと同時に、綾波とかアスカとかに対する「萌え」みたいなもの、これは動物的読み（消費）の典型的みたいなものですが、こういうものを否定していないわけですよ。エヴァに対する「萌え」みたいなものも、深津さんのいう、事故になるんですか？

西 嶋 「萌え」はまた違う議論になると思う。作品は重層的に理解されるものだから。でも、むしろ、庵野は「萌え」的な消費を否定したかった。だからテレビ版の最終話にわざと「学園エヴァ」をやって、視聴者を煽った。でも、それが挑発と受け取られずに、多くの視聴者は、それがほしかったという反応をしてしまった。ここにある種のコミュニケーションの事故があるんだよね。

「萌え」も広義になりすぎて収集がつかなくなっているけども、最近は共感ベースになってきた。なんていうか、かわいい子がでたら、みんな「萌え〜」っていうみたいな。その共感ベースのコミュニケーションでは、作品に描かれる微妙な差異や、私とAさんとBさんとの反応の仕方の微妙な差異が、なんとなくやむやにされてみんな「萌え〜」ってなっちゃう。そのあたりにコミュニケーションの事故が誘発されにくい事態が起きてると思う。

でも、俺の「萌え」と、お前の「萌え」は違う、とか。このキャラクターのこの場面はこの子のどういうことをあらわしてるからいいんだ、わかってんのか。みたいな、細かな差異を、まるで自分のことのように気にして話をしていくコミュニケーションもありうる。微妙な差異が主題になるコミュニケーションだと、事故りやすいとおもう。

結論としては、「萌え」は基本的にはコミュニケーションの事故を回避する共感ベースなものになりやすい。でも、事故る「萌え」もあるような気がするって感じかな。

マリン 僕は、少し『エヴァ』の消費のされ方ということにこだわってみたいです。西嶋さんが、物語の受容は重層的に行われるものだ、というのはその通りだと思います。たとえば、西嶋さんは、エヴァによって自分の内面を揺さぶられたということを以前言っていたと思うんですが、『エヴァ』をそうやって受容した近代的読者はどれだけいたのかというのが問題です。

僕は、『エヴァ』の「お客」のほとんどは、綾波萌え、アスカ萌え、シンジ萌え(?)をしている「動物的」読者なんじゃないかと思うんです。『エヴァ』に関する言説の多くは、「エヴァのこのシーンは現代の人間のアイデンティティーの本質を付いてるよね」みたいないわゆる文学的なものではなく、「綾波の包帯が萌え」とか「アスカのツンデレがいい」みたいな、そんな話だったんじゃないか。

「萌え」の話は、「2ちゃんねる」とかの掲示板やオタク・コミュニティの間であれこれ言われるだけで、結局『エヴァ』もコミュニケーションレベルでの共感を生むための「萌えネタ」として消費される部分がほとんどだったんじゃないか。社会現象といっても、結局、多くの子どもをオタクにしたいだけでしょう。僕はそう思う。

西 嶋 私はその中にいましたが(笑)、当時の報道とかを見てても、必ずしもそうではないですよ。『エヴァ』を見て語りだす若者たち、って特集組まれてやったりしてましたし。エヴァが何かとトラウマ的体験になってる、というのは私の周りにはいます。

ただ、総数として「萌え」がクローズアップされてしまうのは、そういう近代的読者も、「萌え」関係のものも享受しているってことです。完全に「萌え」だけの人もあるし、トラウマを受けながらその鬱屈を「萌え」ではらしてる人もいます。そうすると総数は「萌え」が多くなりますよね。

『エヴァ』の場合は、本当に出口がなかった。だから、『エヴァ』に衝撃を受けた近代的感性を持った人も、そのままずると『エヴァ』のまわりをまわっていたら、気づくとオタクになっていた、っていうのはあるでしょう。それはそれで、おもしろいと思います。実際、そういう意味で、『エヴァ』に影響を受けた人たちが作品をつくりはじめてますしね。

深 津 マリンさんの指摘はもっともだと思う。ただ、ある人は「萌え」に終始し、居心地のよい共感のコミュニティ作りで終わるかもしれない。でも別のある人は、あまりにそれに入れ込んだ結果、コミュニティのルールを逸脱し、事故を起こすかもしれない。そういう、「かもしれない」に開かれていることが重要だと思う。

マリン その「かもしれない」可能性というのは、どんなにくだらない作品にもありますよね。深津さんは、「かもしれない」可能性を大きくさせる作品・物語が「文学」であると考ええるということですか。

西 嶋 私はそう考えています。その時代のより多くの人にその「かもしれない」可能性を開く作品が、文学として評価されていいんじゃないでしょうか。エヴァはやはり文学だったのではないかと、という気がしますね。

深 津 マリンさんのいう「文学」は制度としての文学だよ。文学史に載ってるやつ。ここでの議論では、この問題は括弧入れしてます。で、「コミュニケーションの事故」を発生させる「かもしれない」もの＝文学的事象という前提でハナシを進めてる。「どんなにくだらない」のくだらないには、制度的な文学としてくだらなくてもいうニュアンスがあると思うんだけど、この場合は、制度としてくだらないものにも文学的事象の可能性はありうる、と考えています。なんか詭弁っぽいやけど。

それで、西嶋さんの意見をまとめると、文学的事象が起きるか否か、という岐路は、自己を投入する対象に出会えるか、否かということなのかな。太宰「萌え〜」で終わるのでなく、『斜陽』と『人間失格』どっちがいいんだよ、おれは『人間失格』を認めない……みたいな。いっばう、『凹村戦争』って、よく出来た作品じゃん、っていう感じで終わっちゃうから、そういう意味で自己投入できず、したがって、コミュニケーションの事故も起きにくい。

西 嶋 私はそう解釈してますけど、違いますかね。結局、とるに足らない作品にも「文学的現象」を見出しちゃう人っていると思うんですよ。それはそれで重要なことで。でも、時代によって、より多くの人の琴線に触れる作品があるし、それが時代を越えて琴線に触れる作品もある。それだけのことではないかと思えます。

深 津 同感なんだけど、でもそういうことだと、世の中がバーチャル化してしまっても、よい作品が作られれば「コミュニケーションの事故」は起きるわけだし、だから「2・0次」ぜんぜんオーケー。「やっぱ人文だよ」という神成さんから馬鹿にされそうなオチになってしまう。

西 嶋 マンガとバーチャル化した社会の差異の話に一応反応しときます。

マンガやアニメといった物語とバーチャル化した社会っていうのは、等価ではないと思うんですよ。

例えば、マンガやアニメはある程度、制約がなく描ける。人々に並々ならぬ影響を与えることができる媒体だけど、そこで描かれる世界は別になんらかのテーマ性をもってなくても、私たちに快樂を与えてくれることに特化した作品でもいい。最近のハリウッド映画とかもそうです。まあ、しかし、そのような作品でも社会的に影響を与えてるし、そのようなアニメ・マンガ・映画の表現を通じてしか私たちは現実を認識できないのかもしれない。でも、その枠じゃとらえきれないものがあるよー、「一・〇次の現実」には、って議論だと思います。

しかし、バーチャル化した社会っていうのは、制約があります。それはあくまで、現実のあるものをバーチャルに置き換えているからです

。バーチャル空間で取引した株で失敗すれば、それは現実で失敗したのとなんらかわりません。それに、いざ株を売りに出そうとしても、サーバーが落ちていたり、停電があったり、ウイルスに感染していたり、ハードディスクがクラッシュしたり……様々な不確定要因があります。もっといえば、パソコンの画面やDVDだって薄いですが物理的な変化によってなされているわけで、温度が下がれば機能しなくなったりします。それにあくまで私たちはこの生身の体から（今のところ）自由になれないんで、おなかは減るし、トイレにも行きたくありません。そういうありきのバーチャルなんです。

実は、そんなに「居心地」はよくなかったりするんですよ、ウェブって。

深 津 そういう物理的な制約というのが、「二・〇次」にとっての不確定要素＝他者（事故のもと）になるような気がするなあ……。

西 嶋 あー、ちなみに、私が構想してること（割と陳腐なことですが）をいっておきますと、バーチャル上でおきるコミュニケーションの事故を題材にした作品に与える文学賞みたいなのができるといいと思っています。

あるいは、そのようなコミュニケーションの事故を誘発させるようなウェブサービスに与えてもいいです。プログラマーが文学賞とるのっていいなあ、と私は思ってしまうのです。

そうやって、世の中を「二・〇次」だけじゃなくて、「一・五次的現実」にも向かわせるような動きが出てきたらいいな、と思っています。



## 08. 『ハルヒ』の読み方、そして文学の宿題

西 嶋 それで、「物理的制約」による不確定要素以外に、例えば今の1・0次の現実においておこる不確定要素ってなにかあるんでしょうか。いや、その不確定要素を説明すると、ある意味で不確定要素ではなくなってしまうのかもしれない。だからといって、そのような不確定要素というあるかないかわからないものを「否定神学」のように崇め奉る態度は私はいまいち乗れません。とりあえず、過去の文学作品に描かれたその「1・0次の現実」の不確定要素を分析して、そのようなことがウェブ上でも起きるような、環境を作ってはどうか。という提案を私は今回一貫しています。ウェブ上では、ウェブ上での、不確定要素があるわけで、そのあたりは現実の劣化版ではなくて、オルタナティブだと考えてよいと思っています。

深 津 既成の文学を「1・0次の現実」と言えるのか、という問題はあるよね。文字によって構築された世界だから。

マリ ン 確かに、「1・0次の現実」ではないですね。でも、その小説すら、いまは誤読の対象としてではなく、コミュニケーションをとるためのネタになっているということが問題の本質ではないでしょうか。

最近の小説のベストセラーは、なんといっても『ハルヒ』でしょう。シリーズ累計三〇〇万部でしたっけ。とにかく、めちゃくちゃ売れているわけですが、『ハルヒ』の消費のされ方って誤読ではなくネタの共有なんですよ。このあたりは西嶋さんが、詳しいと思いますが、「あー、このネタわかるわかる」っていう共感を読者の間に抱かせるってのが『ハルヒ』がウケたとこなんですよ。それはある意味で、誤読を許さない作品であるとも言えると思うんですよ。「え、おまえ、あのネタそんなふうに解釈してんの？それはあり得ないよ。実はこういうネタだよ」みたいな感じで、作品の読み方が固定化している。そして、『ハルヒ』のネタをみんな「あのネタわかった？そうそう、あれだよね！」って感じで共有して、満足する。

『ハルヒ』の場合はこれに加えて、「萌え」もありますが、その萌えすら結局ネタ扱いされている。ロリ巨乳とか、ミステリアスな眼鏡っ子とか、ステレオタイプ化された萌えキャラがネタとして物語に配置されている。ともかく最近の小説(ラノベ)はこんな消費のされ方をしているんじゃないか。そういう意味では、『エヴァ』よりもかなり動物化が進んでると思えますよ。

深 津 量的に言えばマリ ンさんの言うとおりのかもしれない。でも、昔の文学青年にとっての三島や太宰や大江も、そんなに変わらないんじゃないか、って気もする。だからやはり、『ハルヒ』を、西嶋さんが『エヴァ』を読んだように読む読者がいるかもしれないし、そういう可能性に開かれているなら、ライトノベルとか、純文学とか、あまり関係ない気もするんだけどね。これは、ライトノベル現象を「他者」として受け止めたくない(既成の解釈コードで理解したい)文学研究者の抵抗かもしれないけど(笑)。

西 嶋 『エヴァ』と『ハルヒ』の単純な比較はできないと思う。『ハルヒ』の方がヒットはより限定的だし。確かにオタク業界では『ハルヒ』は『エヴァ』以来のヒットかもしれないけど、社会的な影響やジャンルを超えた反応って意味では『ハルヒ』はそこまでの展開をみせてない。だからといって、『エヴァ』がよくて、『ハルヒ』だめってことでもないけどね。エンタメっていうジャンルがあっという間だけだし。

でも、『ハルヒ』は『ハルヒ』でちょっと複雑なのよ。あれは実はメタジャンルもの、メタキャラクター小説なわけ。もちろん「動物的」にヒットしてるっていうのもあるけど、読み込むと結構おもしろい構造が見えてくる。

ステレオタイプ化した「萌え」キャラだって、「ステレオタイプ化した萌えキャラ」として出てくるわけ。自覚的に。んで、「そんなのありえねーだろ」って突っ込む。

「萌え」やご都合主義とどう扱っていくのか、ライトノベル的物語とどうつきあっていくのか、っていうところを考えるライトノベルでもあるわけ。

少なくとも『ハルヒ』のライトノベル読者にはそういう反応してる人だっている。はたからは見えにくいのかもだけど、むしろそういうオタク像のほうがステレオタイプの反応といえなくもない。

深 津 話を戻して西嶋さんのさっきの問いに答えるなら、やっぱり小説って誤読(多義的な読み)を許すジャンルだよ。エクリチュールの問題。あと、やはり物理的な要因も大きいと思う。男女の性差とか、都市と農村の距離とか、生活様式の違いとか。

西 嶋 でも、このようなものって、現代においては否定的なニュアンスで語られることが多いですよ。地域格差や男女平等や格差社会って言葉が如実にあらわしています。

先ほどもいいましたが、ウェブだってそんなに居心地がいいとは限りません。そんななかで、自分が望む姿や受けるべき制約を受けない姿で人と人とがコミュニケーションをとることってホントにストレスないものだと思います？ 二・0次のものになると。私はそこに新たなコミュニケーションの可能性が開けるんじゃないかなって期待したいんですが。

深 津 たしかに。ラグが誤配をもたらすわけだし、二・0次を目指す人は、そのラグを無くそうとしている。ただ、西嶋さんが言うように、ウェブだってそんな居心地がいいわけじゃない。「自分が望む姿や受けるべき制約を受けない姿で人と人とがコミュニケーションをとることって」、ほんとうにできるの？ この身体的制約を失ってネットに繋がるのだろうか？ その意味で、理想と現実(制約)の間にラグはつきまとうのでは？

西 嶋 できません。だから、バーチャル化してもいいじゃんって考え方です(笑)。

深 津 なんだ……(笑)。おれの考えも、つねにコミュニケーションの事故は起きうる、というものだから、そうなると争点はなくなっちゃう。でも、この解決は、神成さんに笑われる気もするけどね。

西 嶋 いや、宿題にできただけで成果だと思いますよ。文学のこれからの課題ってこういうことだと思います。いちお一部外者の私がいいうのもなんですが、これは、また継続して考えましょう。来年当たりだと具体的なウェブサービスの話とかでもいいですね。

深 津 これからまるで新しいコミュニケーションの様式は生まれると思う。ただ、それは古い思考モードによって規定される(でない、認識できない)わけだから、まったく新しいとは言えないけど。でも、西嶋さん同様、そういうコミュニケーションのあり方に期待する面はある。

ケータイが普及する前は、女の子の家に電話すると親が出てくるから、すごく緊張した。でも、今って、そういう緊張感がないよね。だから、昔のほうがよかった、というのではなく、関係性が変わったことによって築かれた関係性の中で、要は他者としての女の子と向き合う技術を獲得していけばいいな……、と(笑)。そういう感じです。

西 嶋 「要は他者としての女の子と向き合う技術」を探して、来年のこの鼎談で話しましょう(笑)。

マリ ン 「ゲンダイモンダイ」では少し議論したのですが、他者としての女の子と、「ゲームの中の女の子」の違いの問題も考えてみたいですね。

深 津 そうだね。一・0次と二・0次の話をするなら、ほんとうはこのネタのほうがよかったのかもね。

## 09.ポスト近代の政治

マリン 私は、ポストモダン社会の政治的問題について、特に国家への帰属意識の必要性という視点から問題提起を行いたいと思います。二〇〇七年のわれわれはポストモダンと呼ばれる時代に生きています。ポストモダン化は、大きく分けて以下の二つの方向性を持つとされています。

①情報技術の発達やグローバル化などによって、社会の複雑化や流動化が進み、社会不安が高まる

②政治イデオロギーや社会の伝統が衰退して、人々の価値観が多様化する

まず①に関して。社会不安が高まると、人々はセキュリティの強化を望むようになる。自己の安全確保は本能レベル、動物レベルの欲望として表出するため、人間のセキュリティへの欲望は際限がありません。しかし、いくら環境を整備したところで、身の安全が完全に保障されることはない。その不完全性がさらに不安を招き、セキュリティへの欲求は永遠に尽きません。哲学者の東浩紀は、この状況を「不安のインフレスパイラル」と呼んでいます。

セキュリティの欲望が高まるという状況の背景には何があるのでしょうか。まず指摘できるのは、人々の中の相互不信の高まりです。現在、日本の多くの都市では、地域のコミュニティが衰退しており、隣に住んでいる人間すらこの誰かわからない、という状況になっています。旧来の地域コミュニティは、地域を閉鎖的にし、コミュニティ内の差別や村八分などの温床となるなど、負の側面も持っていました。ただ、コミュニティによって、地域の連帯感が高まり、住民が相互に配慮する環境がつけられるという面もあったことは指摘しておくべきでしょう。地域コミュニティは、地域住民の相互不信を軽減し、地域社会の複雑性を縮減するという機能を確かに持っていたのです。この地域コミュニティの機能が衰退によって、地域のセキュリティの担い手は、人間から技術へとシフトしました。現代社会では、監視カメラやオートロックが住民の安全保障の機能を果たしており、我々は、隣人よりも監視カメラを信頼して日々の生活を送っています。このような社会では、地域の誰もが自分に危害を与えてくるかもしれない「他者」として意識されます。

次に、②に関して。第二次大戦後に起こった共産主義対自由主義という二つのイデオロギーの対立は、世界を二つの勢力に分断する冷戦という事態にまで発展しました。冷戦の時代、共産主義や自由主義というイデオロギーには、確かに人々を「動員」する力があつた。日本では、学生を主役とする大衆レベルの政治運動が一九六八年にピークを迎えましたが、その後は急速にセクト化・マイナー化していきます。

次第に求心力を失っていったイデオロギー対立は、ついに九一年のソ連の自壊によって集結します。共産主義イデオロギーは壊滅的な打撃を受け、人々のイデオロギー意識も急速に希薄化します。さらに日本では、ポスト構造主義の思想的な流行、核家族化・個人主義化などの進展を受け、伝統的価値観が急速に衰退しました。政治の世界では、二大政党制が進み、自民、民主が議席を集める一方で、社会党・共産党といった「左」のイデオロギー政党は、議席を失い続けます。先進各国の二大政党の政策は接近しており、政治の争点はほとんど曖昧になってきている。このような状況下で、人々はイデオロギー、政治、伝統といった「大きな物語」に対する興味を失い、各々の興味・関心にしたがって、「小さな物語」を形成するようになりました。

これがポストモダン社会の政治状況です。ポストモダン社会の功罪はさまざまところで論じられていますが、私は特にその政治的な問題について指摘したいと思います。ジョン・ロールズは、有名な「無知のベール」という概念を用いて、リベラリズムの本質は「他者への共感可能性」にあると主張しました。「他者への共感可能性」の重要性は、リベラリズムに限らず、「国家」を考える上でははずせない問題です。ベネディクト・アンダーソンが指摘したように、国家はあくまで「想像の共同体」であり、その存立基盤はフィクショナルなものです。「国民」という枠でくくられる人々も、その国に生まれたという以外に何の共通性も持たず、彼らが共有しているであろう「国民」としてのアイデンティティーは「幻想」に過ぎません。

私が危惧するのは、ポストモダン化によって、国家のフィクション性が明らかになる一方で、セキュリティ化やグローバル化などによって国民相互の相互不信が高まり、国家に対する帰属意識が急速に弱まることです。これはすなわち、国家を共同体たらしめている「想像」がなくなることです。このような事態が深刻化すれば、国家は崩壊せざるを得ないのではないかと。

これが私の持っている問題意識です。そして、今回の議論で論じたいのは以下の三点です。

①国民の国家への帰属意識が弱まることでどのような問題が生じるか

②国家への帰属意識が弱まることは大きな問題なのか、あるいは些細な問題なのか

③もし帰属意識が弱まるのが問題だとするならば、どのようなかたちで帰属意識を高めるべきか

議論を楽しみにしています！

## 10. 国家の希薄化は動物化をもたらすのか

西嶋 東が言ってる「国家の希薄化」の問題だけど、その前提をもう少し確認しておきたい。近代市民社会は、主体的な市民っていうのが社会を動かしてた。それが、例えば「国家の希薄化」が起きたとすれば、ポピュリズムで動く動物、あるいは自分たちのことにしか興味をもたない動物になってしまうわけだ。ここで明らかになったのは、近代市民社会の市民っていうのが、国家を前提としていたということ。市民＝国民だったわけだよ。マリンスンの話に別角度から切り込むと、動物になるか、主体となるかっていう選択でもあるとおもう。

それで、例えば、二〇四五年の主体が、国家によらないものって可能性もあると思うんだよね。ちょっと、最初っからよく整理できてないことをいうけど、とりあえず、マリンスンの文章読んで感じたのはそんな感じのことです。つまり、国家の希薄化＝動物化では必ずしもないと思うのだよ。

マリノ コメントありがとう。『ギートステイト』の舞台である二〇四五年の日本は、現在のポストモダン社会がさらに進展した姿として設定されているよね。西嶋さんがまとめたくれたのと、僕の文章をつなげると、ポストモダン化が進むと国家や政治は必要なくなるか、という問題だと思います。

深津 マリノさんは、国民の国家への帰属意識が弱まること＝みんな動物になること、っていうまとめでいいの？ 新たな主体の可能性も一応ふまえておきたい。マリノさんの文章だと、ちょっと「国家の希薄化による動物化」と「国家への再帰属化による主体化」二者択一的になると思ったので。ここは、マリノさんはどう考える？

西嶋 「政治」っていうのは近代的な主体がやることだと思うんだけど、マリノさんは「国民」じゃないと政治はできないと思ってる？ それとも別の主体がありうると思ってる？

マリノ 動物的主体は、政治はできないと思ってます。西嶋さんと深津さん、同じ点に疑問を持たれてますね！ お二人とも指摘されているとおり、僕の問題提起では、動物化と国家の希薄化がニアリーイコールになってますね。これは書いているうちは自覚しませんでした。

でも、動物化にはかなり強く対抗する必要があると思っていて、対抗する力があるのは国家や政治しかないでしょ、というスタンスです。そういう意味では、僕は、動物化か主体化という枠組みを使ってますね。このあたりは、西嶋さんに「第三の道」みたいなものを提示してもらえると議論がおもしろくなると思います。

深津 でも、「第三の道」を探らないと、言ってることが、森・元首相と同じになっちゃうよね（笑）

西嶋 「第三の道」を考えるときにもいえると思うんだけど、じゃあ「国民」ってそもそも何なんだろうって話になるよね。「国民」という概念のどこが希薄化したから、政治ができなくなるんだと思う？ 逆に「国民」という概念のどこを回復すれば「政治」っていうのはありうると思う？

深津 そのあたり、「無知のベール」の話につながりそうだね。

西嶋 国民という主体以外にも政治ができるかもしれない。それは企業を単位にしたものかもしれないし、あるいは趣味集団が政治化したものかもしれない（オタクの市民化って道は私は実は模索しようとおもってることでもある）。あるいは世界市民かもしれない。もしくはネット上のコミュニティを単位にしてるかもしれない。ネットを通じた主体化って結構ありうるかもしれないと思ってるんだよね。まあ、今のうちは空理空論なので、このあたりは今日はそこまで深めなくてもいいかな。

マリノ 国民ってそもそも何って問題はとても難しいので、直球の返事はできないけど、ここで単純化して国民を「政治をできる人」と定義すれば、自分の小さな物語に埋没しないで、他者のことも考えて国家という大きな物語に参画しようとする人かな。この大きな物語にコミットする意識があれば、「国民」になっていられるのかな。

なんかえらい保守的な主張になってますがw

西嶋 「大きな物語」の話はちょっとあぶない気もするね。それは、「政治」だけじゃなくて、人々の「生」も取り込んでしまうものになってしまうから。もうちょっと割り切った形での「公共」への参加・関心であってほしいかな。深津さんの「無知のベール」との関連性の指摘はそのとおりで、要は自分の所属する集団以外への想像力が欠けているから、動物化してんじゃないかとも思うんだよね。「国民」っていう想像の共同体を通じた想像力が、国民国家では機能してた。でも、それが失われつつある。それは、すぐ回復できるようなものでもないと思うんだけど、どうなんでしょう。

深津 無知のベールに関して。セーフティネットって言われるよね。「累進課税」とか、オレは嫌！ っていうって金持ちが降りちゃえば、国家ってなくなっちゃう。オレはたぶん、（独身だから）税金をけっこう取られてるほうだと思う（元の収入は大したことないけど…笑）。でも、これはまあ、しょうがないと思って払ってる。「他者への共感」に発するというより、そうしないと、社会不安が増すから、というけっこう利己的は理由だったりする。でも、ここでいう「社会不安が増すから」みたいな考え自体が、想像の共同体を想像しているわけだね。

西嶋 「大きな物語」っていうのは、ある意味、それを通じて世界を見通す装置でもあったんだよね。簡単に世界が説明されすぎちゃうんだけど、だからこそ人々はその「大きな物語」に参加できた。

でも、今は瑣末的な情報（「小さな物語」）しかない。その瑣末的な情報を取捨選択するのは、個人だけど、そんなめんどうくさい。だから、どーでもいいや。っていうので動物化やポピュリズムが起こる。でも、単純に「大きな物語」に帰れともいえないし、そんな方法もいまいない。そのあたりのことを質問したかったのです。

マリノ 無知のベールは深津さんが指摘されているとおり、セーフティネットを肯定するためのものなんですよ。みんな「他者」のためというよりも、「自分ももし稼げなくなったら・・・」みたいな不安を軽減する装置としてセーフティネットは機能している、と。

単純に「大きな物語に帰れ」とは言えないよね、という西嶋さんの意見はとてもよくわかります。宮台真司なんかは、僕らと同じように色々思い悩んだ結果、「やっぱり大きな物語だ！ それなら天皇だ！」となってしまったわけですがw、僕はそこでナショナリズムや天皇を持って来たくない。そこで僕が大きな物語の代わりに、動物的个人を相互に連帯させるきっかけにできるかもしれないと思ってるのが「社会契約」というフレームなんですよ。

深津 「社会契約」というフレームについて、もっと聴きたいな。

西嶋 そうですね、その社会契約のフレームが、今回のテーマになるかと思えます。前に言っていたルソーの話とかも関係するのかな。

深津 確認。個人が何ものにも妨げられず、欲望のままに動けば社会はうまく回る、というのがリベラリズムの基本原則だよ。この場合の個人は、世界を見通して利害を判断できる近代主体（というフィクション）。そのフィクションが壊れて、欲望それ自体がむきだしに前景化したのが、動物化。それはリベラリズムと違うわけだよ。で、マリノさんが目指すリベラリズムというのは、どんなビジョンなの？ さっきの累進課税の話は、けっこう、古典的リベラリズムだったね、そういうことでしょうか。

マリン 深津さんの「欲望のままに動けば社会は上手く回る」というリベラリズム観は、ちょっと違うと思います。自由にすればうまくいくというのは、リバタリアニズムではないでしょうか。リベラリズムは社会契約説に代表されるように、国家と個人が契約をして、個人は国家のためにしっかりと義務をこなすという考え方です。リベラリズムは他者や国家へのコミットも強く要求する思想だと僕は理解しています。

深津 レッセ・フェールというのは、古典的リベラリズムではないの？ あるいは、ベンサムでもいいけど？ ベンサムの、最大多数の最大幸福って、あの当時のイギリスだから言えた（植民地という外部を捨象した議論である）というのはあるけど、欲望充足を妨げなければみんな幸せになる、という思想だったのでは？ アダム・スミスの「自由放任」とか。あれ、リバタリアニズムなの？ リバタリアンって、リヴァイアサンとは無関係だったけ？ ごめん、昔のことで忘れてしまいました。そのへん、あらためて説明してもらえるとうれしいです。

# 11.社会契約による国家と個人の関係の再構築

マリ 社会契約説は、国家と個人が契約するという発想から来てます。国民としての権利を国家から受け取る一方で、国民は国家に対して納税とかの義務を果たすと。日本の法律を僕らが守っているのも、こじつけてしまえば、国家と契約しているからだと言える。この社会契約というのは、その国に生まれちゃった時点で、自動的・強制的に結ばれると考えて良いと思います。国民が国家の法律を守ったり、納税をしているのは、国家と契約しているからなんだよ！ってのをもっと強く押し出せば帰属意識が強くなるのではないかな。これはちょっと楽観的考えですが。この契約条件は、選挙などの投票行動で変えられるし、合法的なかたちでロビーイングすれば議員が議会で自分の意見を代弁してくれると。そういうことを強調してみたらどうなるか考えてみたい。アメリカなんかは、外国人がアメリカ国籍を取得するときに、とても厳格な式典を開くんですが、日本も例えば成人式のようなイベントを今のどうしようもないものから変えて、「国家と成人との契約式」みたいな式典にしたらどうなるか。まーこれは余談です（笑）

あと、社会契約のいいところは、「契約」だから「破棄」できることなんです。嫌な国に生まれちゃったときは、ロック的な「抵抗権」をつかって、国から脱出して別の国に行くこともオーケー。これは東の言う「降りる権利」とも近いです。国家との契約を締結したり破棄したりできるようにすることで、日本が嫌な人は外国行っていいよー、日本に來たい人は日本と契約してください、みたいな感じにする。これは、移民問題をでかくさせる恐れがあるので、おいそれと実行できないですが、「契約」の理念をつきつめるとこんな感じですね。

深 津 で、そういうふうに「契約」するためには、理性が必要なわけだよね？

マリ そうですね。その理性っていうのが問題なんですよ。じゃあ、「理性がない」とされる人は国家に参加できないのか、という問題がある。だから僕は「理性がない」とされる人は、国家が守りますよと。そういうことを契約内容に含めなきゃいけないと思う。

深 津 これはポストコロニアル絡みで、難しい問題だね。「理性がない」と、誰が名指せるのか？ とかね。マリさんの言いたいことはわかるけど、一歩間違えると、パターナリズムと批判されそう。

西 嶋 その社会契約の話はわかるんだけど、結局流動性を高めてるだけじゃなくって気もする。それは、社会の複雑さをどのように縮減してみせてくれるの？ あと、そういう流動性がある話を押しすすめると、ますます「国民」的同質性とかは想像しにくくならない？

想像の共同体を通じた想像力は減退しない？ 結局のところ、社会契約論は、動物化防止にどういうふうに関与するかってところだとおもう。

深 津 たしかにね。そこに生まれた不条理を「破棄」できる、ってことになるって、流動性が高まり、それは結局のところ、動物化の流れにむしろ棒さすのではないかな、という感想は同意できる。先々週にマリさんが言った、イタリアやベルギーのように、北が南を「切る」っていう話にもつながると思う。

西 嶋 私がちょっと前に、パトリオティズムというので議論したかったのは、「そこに生まれた不条理」っていうのを逆にリソースにできないかなって考えです。ある地域単位でまとめることで、複雑な社会にある程度見通しがたつと思ったんですよ。社会の複雑さの縮減ですね。細かいところでどうするかはもちろん個人個人の自由ですけど。

マリ 流動性を高める可能性があるというのはその通り。だけど、流動性がある分、この国にいる「理由」というのが明確になるかもしれない。「理由」があれば、その分国家にコミットする気持ちも強くなるんじゃないかな。国家にコミットすることが、社会の複雑性を縮減する何かになるかも。これは、ナショナリズムと紙一重の議論ですが、ナショナリズムと違うのは、国家というのが自明のもので、運命共同体だといって国家を絶対化するのに対して、契約国家は、国家を相対化しているという点。うーん、リベラルなナショナリズム、みたいな？ もちろん、契約している国家が嫌だけど、お金もないし不安だから移動できない人もいると思う。そのような人々には、フォローの道を考えなくては行けない。そこはまだ詰められていないですが。

深 津 選んだ、という自覚があれば、コミットメントするもんね。それはよくわかる。ただ、マリさんも言うとおりの、選べない人もいる。そこをどうするかは、やはり難問ですね。

マリ パターナリズムだという批判が来ることは予想できますね。政治力のある金持ちが、「弱者を保護しない」というように、契約内容＝法律を書き換えてしまう可能性があります。これは大問題です。えっととりあえず問題は指摘したおいて、解決策は今議論しながら考えます（笑）

西 嶋 お金もないし不安だからフォローできない人もいると思う。っていうか、ほとんどそうだと思うけど。国境をスイスイ移動できてしまうような人は、少数派だよ。なかなか「不条理さ」とは決別できないもので、それは例えば母語の問題もあるし、受容してきた文化の問題もある。政治的な問題であると同時に「人の生」の問題でもあるんだよね。あんまり他国へ行くインセンティブがないとなると、それはもう社会契約っていうのはタテマエって現状と同じになっちゃう気もするな。あと怖いのは「この国を選んだお前の自己責任だ」として、そういう選べない弱者が切り捨てられる議論にもなるかも。

深 津 社会的弱者が、自己責任という名で排除される昨今の風潮を連想させるね。せつかくいいこと言ってるのに、結果、現状維持とあんまり変わらなくなる（笑）

個人的な嗜好としては、「選ぶ」ことによる「責任」というマリさんの考えは魅力的。ただ、西嶋さんの言うように、そこに生まれた不条理っていうのは、でもやはり「破棄」できないよね。日本人に生まれ、日本語でしか考えられないとか。国文学を日本文学という、なんか日本を相対化する気がするけど、でも、日本文学・英文学・米文学…って、ワン・オブ・ゼムで並べられないくらい所与だもんね。うーん、不条理だ。

マリ 確かに、契約国家が誕生しても、国家をスイスイ移動できる人は少ないと思う。だけど、国家を移動できるってのは、契約国家の付随的な機能・手段であって、一義的には、国家と国民との関係を明確化するということなんだよね。偶然その国に生まれてなんとなくここにいます、っていうのが現状だけど、契約国家では、その国にいる限り国家との「契約」を認めているということになるから、そうになったら「おいおいこんな契約じゃ困るよ、ふざけんな」っていう意識が生まれやすくなって、政治や国家に対するコミットする気持ちが強くなるんじゃないかなと思う。とりあえずそれが担保できれば、動物化に対する一つの抵抗にはなるんじゃないかな。

西 嶋 深津さんの言うように「選ぶ」ことによる「責任」というマリさんの考えは魅力的だとは思いますが。それだとやはり、個人が、必要な情報を取捨選択して、世界を把握しないといけないと思うんですよ。果たして、複雑化した社会でそれができるかっていうところがやはり私には疑問です。個人と世界を媒介する政治的集団みたいなのがあったほうがいいとは思いますが。それが国家っていうのはもう使えない。いや使うんだけど、それはもう多様すぎて想像できないものになってる。だから、間に何か、地域でも趣味集団でも何か、私が拠って立つものがほしいです。

マリ 確かに、「自己責任圧力」は強くなるね。大きな問題だ。それでも、責任というフレームは簡単には放棄できないし、一定程度の自

己責任というのは必要。責任を取れない人をすくいあげることがどこまでできるかっていうのは、今後議論していくべき問題かな。

西 嶋 マリンさんのアプローチは、なんというか、うーん、それはそうなんだけど、動物化への歯止めにはならないと思うなあ。今だって、別に「契約国家」じゃないってわけじゃないでしょ。税金とられて、無駄遣いされたら怒ってはいるわけじゃん。でも、それは一時的に怒ってるにすぎない。結局ポピュリズム的になっちゃう。それを引き起こす要因が契約国家の考えをいまさら導入したところで、あまり変わらないんじゃないかっていうのが私の考えです。

マリン 日本人は国家と契約しているっていう、観念があまりに希薄だっていうのが問題の本質です。

政治は選択と責任なんだ、という意識がかなり低い。それを高めなきゃなにも変わらないという認識がある。だからこそ契約国家だろう、というのが僕の今回の主張の要旨ですね。

## 12. 島宇宙とどう向き合うか

深津 利害関係が「シマ宇宙化」すると、「おいおいこんな契約じゃ困るよ、ふざげんな」っていう意識が集約されにくくなり、結果、何をやっても政治は変わらない、というニヒリズムを招く。その辺がひとつ問題だよ。

マリン その通りですね。動物化が進んで価値観が分断されると、政治的に有効となる意見集約はしにくい。でも、どうしても意見集約しなきゃいけないと思ったら、それぞれの「島宇宙」の間に橋が架かる可能性があるんじゃないか。「俺たち、島宇宙は別だけど、考え近いよね。ちょっと契約変えるために組もうぜ」みたいな。

深津 今回の民主党の圧勝が、マリンさんのような事例なら嬉しいんだけど。でも、どっちかという、ポピュリズム的な感じがするよね。

西嶋 そうなると、私がかねてから(?)考えているオタク集団を突き詰めることによる政治的な主体化みたいな議論になってくるのかなあ。まずは、島宇宙単位でモノを考えるわけでしょ。島宇宙=パトリって考えでもいいのかな。セカイ系が、「きみとぼく」の関係を守るにはどうすればいいのかわ、考えに考えることで、政治に興味を持つっていうのを、私は夢見るのですが…。

マリン そういう考えを持っているなら、契約国家論と接合しうる部分もあるかもね。

深津 個から普遍へ、っていうのは、「私小説」的パラダイムだね。これは、去年の鼎談でも議論したっけね。

西嶋 そのあたり、私は実はすごく近代主義なんですけどね。

深津 ただ、島宇宙=選択、パトリ=必ずしも選択したものとは限らない、という違いはあるよね。

西嶋 趣味って選択的なんですよーか。

深津 鉄道ファンとか、ガンダムファンとかって、あらかじめ書き込まれてるの？ 日本国に生まれた不条理と、比較できない気がするけど。

西嶋 アプリオリではないですが、アポステリオリでも、「好きになっちゃったものへの責任」、「どうしようもなく好きだ」っていうのは、必ずしも選択にはよらないと思ってます。それは、「アポステリオリ」ですが、私の「生」の一部となっており、そう簡単にとっかえひっかえできないものだと思います。

深津 「そう簡単にとっかえひっかえできないか」と「絶対に取り換えられないか」は、かなり違うのではないかと思うんだけど(笑)、力点のおき方の違いだし、本論から外れるので、とりあえず了解です。

西嶋 すみません、了解です。

マリン セカイ系が、「きみとぼく」の関係を守るにはどうすればいいのかわ、考えに考えることで、政治に興味を持つ・・・

ルート①: 「きみとぼく」の関係を守りたい→政治に参画すれば守れるかも→政治に関わると「きみとぼく」以外の他者も見えてくる→他者にも目を向けなきゃ、となればベスト。これが結局「きみとぼく」の間だけでグルグルすることになると、他者がいないという意味で問題。

深津 ルート①でいくと、結局、他者(外部)への想像力ということなるのね。なんとなく、議論が一回りした感じ(笑)。やっぱ、三人とも近代主義者なんだよね。って、確認して、安心してどうする(笑)

西嶋 やっぱ、三人とも近代主義者なんだよね。って、確認して、安心してどうする(笑) 自閉的島宇宙になりかねませんね(笑)

深津 まったくそう。ただ、やはり、近代のパラダイムで、現代(?)を語らざるを得ないというアポリアはいかんともし難い。「ニュータイプ」でないから(笑)

西嶋 ルート②はあるの？

マリン ルート①は政治参加・セカイ系バージョンで、ルート②は、政治参加・契約バージョンです。

ルート②: 国家と個人が契約→個人が契約内容に納得いかない→政治参加したい⇒政治参加するには連帯が必要→他者発見。こういう感じですよ。

## 13. ポスト近代の憂鬱

---

西 嶋 まりんさんの「日本人は国家と契約しているっていう、観念があまりに希薄だ」というのはなんとなく頷けるんだけど、じゃあ、アメリカやヨーロッパの国で動物化は進んでないの？って気もする。日本固有の問題である動物化と、世界的な潮流である動物化とわけて考える必要があるかもしれない。

深 津 アジアって、どうなんだろうね。華僑の人たちとか。

マリ ン この問題は整理しなきゃいけないですね。たとえば、東の動物化論の元ネタとなっているコジェーブは、動物化＝日本化、みたいな文脈で論じているんだよね。僕は今、ポストモダン期における国家のあり方という観点から、ヨーロッパにおけるEU統合の問題（特にEU憲法批准問題）と、アメリカ人のナショナル・アイデンティティーにとっても興味を持っています。アメリカ人ってやっぱナショナル・アイデンティティーが強い気がするんですよ。まあ「気がする」って言っている時点で勉強不足なんだけど（笑）、とにかく日本よりは強いはず。だから、そこが脱政治化という意味での動物化に対する抵抗になっているかもしれない。でも、アメリカもかなり選挙投票率低いだよね。このあたりはしっかり検証します。

西 嶋 動物化って、日本がアメリカナイズされるイメージもあるけどね。マクドナルドとか。

あと、アメリカはポピュリズムがすごいでしょ。大統領選のテレビ論戦の印象で票もかなり動くっていうし。それって「政治」？って気もするんだよね。

深 津 動物化というと、たしかにアメリカな気がする。日本のスノビズムって、欲望「全開」！じゃないもんね。

西 嶋 さっき、動物化について分けて考えようっていったのはその辺です。

マリ ン 簡単にポピュリズムって言っちゃうと、見えなくなる部分も大きいから、僕はポピュリズムって言葉を使う時は相当注意してるよ。

理想の政治みたいなのは、議論がつきないからとりあえず置いておこう。僕は、アメリカの民主主義というものを、日本が見習うべき点はまだまだ多いと思うな。

西 嶋 うん、見習うべきものはすごくある。アメリカは、アメリカで結構一貫したものがあってよく考えられた制度をつくってると思うから。

でも、それを見習ったところで、世界的な動物化の潮流は果たして解決できるの？って気がしてるんだよ。

マリ ン さっきから議論が堂々巡りになっているけど、僕は解決できる可能性があると思ってる。西嶋さんはできない可能性が高いと思ってる。とりあえず、今回の議論はこれで決着つけよう。

深 津 了解。

西 嶋 了解です。

最後に補足を加えておくと、アメリカに見習うことはある。それは私もそう思う。でも、それは日本固有の動物化に対する問題を解決するためである。しかし、世界的な動物化の流れは、アメリカにも入ってきている。その問題は、日本がアメリカを見習うことによって解決できない。という感じでした。

マリ ン とりあえず、今回確かめたいのは、僕らは近代のフレームでポストモダンに対抗していかざるを得ないのか、否か。僕は社会契約とか言っている時点で、ばりばり近代のフレームだったわけですよ。西嶋は、ポストモダンのフレームでなんとか動物化に対抗しようとしているよね。それは重要な試みだと思います。

深 津 オレは近代のフレームで、考えていくしかないなあ、と思ってる。文学＝コミュニケーションの事故って、ゲリラ戦法だけ。



## 本の紹介

---

■ブックログのパブー西嶋一泰が作成した本

<http://p.booklog.jp/users/souryukutsu>

■文学×政治×文化の批評誌「アユラ」01（無料配信中）

2006年鼎談「交錯するポストモダン ギャルゲー・ネオリベ・動物」

<http://p.booklog.jp/book/14672>

■文学×政治×文化の批評誌「アユラ」02（無料配信中）

2007年鼎談「2045年の計算不可能性 バーチャル・リアル・コミュニケーション」

<http://p.booklog.jp/book/15875>

■文学×政治×文化の批評誌「アユラ」03（100円販売中）

2008年鼎談「ロスジェネなんてぶっとばせ！ 非正規雇用を自由に生きる」

<http://p.booklog.jp/book/15879>

■文学×政治×文化の批評誌「アユラ」04（100円販売中）

2009年鼎談「アカデミック・サバイバル ゼロ年代の研究者」

<http://p.booklog.jp/book/15882>

編集発行：西嶋一泰 <http://d.hatena.ne.jp/souryukutsu/>

イラスト：浅乃ミサキ <http://hinah.fc2web.com/>